

読書完走文

フカミ エミコ

二ページを残すところで競技場が見えた。読了と同時にゴールテープを切れれば美しい。表向きでは本を片手に平然と走りながらも心の内では時代に翻弄された主人公の生涯に心を震わせ、ライバルたちを次々追い抜いてきた。そして誰より速くゴールテープを切ると同時に本を閉じた。

「ご覧下さい、見事な読書完走文です！」

計測係から手渡された一枚の完走文には、文字で描かれたまばゆい模様が広がっていた。オリーブの冠を授かりガッツポーズをとろうとした寸前だった。

「またか…」

眠い目をこすりながら、ため息をついた。三日前は課題本を理解できずリタイヤした夢を見た。それほど追い詰められているのかもしれない。今週末に控えた全日本大学読書完走文大会に。

物心ついた頃にはすでに本を読みながら走っていた。プロのリーディングランナーだった父は遊びの一環だと、小さな手に日本昔話を持たせ背中を押した。よく転び、そのたびにぐずぐず泣く幼い私に父は厳しかった。

「転ぶのを恐れたら負けだ」

父の口癖は今でも呪いのように胸の奥に刻まれ離れない。

「お父さん、かっこよかったじゃない。これしか知らないのよ、許してあげて」

母はそう言って慰めたが、現役だった父の姿を私はよく覚えていない。母に抱きかかえられ沿道で声援を送った記憶が少し残っているだけだ。引退したのは、確実視されていた世界選手権の代表枠から外された翌年。挫折を味わった父が見つけた希望が私だった。ランドセルを背負った私を待ち構える父は鬼に見えた。来る日も来る日も本を持たされては走らされ、それが嫌で父に反抗した。

「自分の夢が破れたからって私に託さないで！ 私には私の人生があるの」

父が私たちの前から姿をくりましたのはその一週間後だった。生活のために働かざるをえなくなった母を見ながら父を憎み、つくづく自分勝手な人だと呆れた。

風向きが変わったのは、全生徒参加しなければならない高校の読書完走文大会だ。

父の束縛から逃れ、読書も走るのもやめていたのに、

「文字の羅列がすごくキレイ！ こんな完走文どうやって描けるの？」

私は高得点をたたき出し、クラスメイトから賞賛された。他にこれといった取り柄のない私はまんざらでもなく、そのノリでかり出されたインターハイに出場した。

「きっとお父さんの遺伝ね」

母は喜んだが、癪に障った私はつっぱねた。

「結果は自分の努力でしょ。お父さんいなくても高得点出せるもん」

父の力を頼らず一人前になること、それこそが父への復讐だと胸に落とし込むと、読書も走ることも新しい章に進めた。

大学からスカウトされると、全日本大学読書完走文大会で優勝するという目標ができた。本格的に練習に取り組むと、それまで自分がいかにもいい文を描いてやろうと打算を働かせていたかに気づかされた。

「本を持つ肘の角度をもう少し開けてみて。そう、走り出しはゆっくりでいい。まっさらな気持ちで大事。ただ純粹に本と向き合い、心を研ぎ澄ませ物語に浸かって。走るリズムに合わせて文字を追って」

ゴールテープを切ったと同時に、脳波キャップがタイムアップする。完走文は脳波キャップと同期していたICチップによってはじき出され、ゴール後ランナーも初めて自分の完走文を目にする。データベースから抽出される言葉はランナー自身の心の揺れ幅に左右され、時に大胆に、または繊細に、文字で描かれた模様は言葉の芸術そのものだ。心拍数をおさえつつフィニッシュするまでに課題本を読み終えるには、体力はもちろん猛禽類並みの動体視力とAー張りの瞬発力と読解力が必須となる。美しい完走文を仕上げるには課題本との共鳴が鍵を握る。あとは自分を信じるしかない。

うってつけの読書完走文日和だった。

テレビの中継車が何台も待機していた。ウォーミングアップしたあとシューズの紐を結んでいるだけで緊張感が半端ない。脳波キャップをかぶったライバルたちもストレッチしたり瞑想したり、それぞれ本を迎える準備を整えている。

スタート時に手渡される作品は作家の書きおろし。短編もあれば長編もある。難解な作品は描かれる文字も複雑になり、読破できずリタイヤする選手も少なくない。

スタート十分前。審判員から選手に課題本が差し出された。思いのほか薄く、ページ数は百ページにも満たない。おそらく一筋縄ではいかない難読系だ。タイトルはあえて書かれていない。

ライバルたちがスタートラインに並び、私も本を片手に前傾姿勢をとる。

パーン！

合図の音で足を踏み出すと同時にページをめくった。

センテンスの長い一人称の文章だったが、作者独特のリズムに乗ると主人公の声が早くも胸に染みこんできた。いつも思うがそれはここではないどこかに連れ去られるような不思議な浮遊感。単なる文字の羅列から映像が浮かび上がる。読み進めるうち、親に見放された娘の物語だとわかる。自分の境遇と重なる面が多く、もしや私に有利な課題本だったのではないか、そう訝るものの驕りは文字列を乱すゆえすぐに考えを打ち消し、残りの距

離と本の進み具合を鑑みた。

後半、一番の難所である坂道が見えた。登りながら感情が苦しみに支配されぬよう、物語への没入感をできるだけ維持しようと構えたその時、少し前を走っていたランナーが転倒した。きっと読む作業と走る動作のバランスを崩したのだ。膝から血を流すランナーを横目に足の回転数が下がっていく。それなのに心拍数は上がる。焦燥感に駆られながら最後の折り返しをまわろうとした時だった。

「焦るな」

その言葉が胸元をすり抜けた。神経が研ぎ澄まされていると、時に沿道にいる人たちの心の声までキャッチしてしまう時がある。そのため支障なく淡々と読み進め、走る鍛錬もしてきた。なのにまた声が心の隙を狙って入り込む。

「転ぶのを恐れたら負けだ」

お父さん？ 沿道から響いてくる声の出所に視線を走らせると、警備員の背後で不安そうにこちらを見つめる男がいた。お父さんに似ているが、あんな弱々しい表情をみたことがないので別人のようにも見える。ざわついた。ページを繰りながらも、心は別の物語を追ってしまう。

「もう少し優しく教えることはできないの？」

父と母の会話を盗み聞きした日のことを、よりによってこんな時に思い出すなんて。

「優しくするのは簡単だ。あの子は甘やかすといい気になる」

事実、大会で結果を残してきた私には慢心があり、コーチにひとりよがりの誤読を何度も指摘された。

「だったらもう少しゆとりを持たせてあげたら？」

「集中させないと怪我させるだけだ」

注意力の欠如もそうだ。それによって読む、走るの両輪が崩れ、転んで怪我したことは数知れない。

あの時、私はダメな子とレッテルを張られたようでひどく傷ついた。自分は人より手がかかるのだと。でも違う。今ならわかる。リーディングランナー一筋で育った父は読書完走文を通して生き方を教えてくれたのだと。私の弱さを強さに変えようとしてくれたのだと。学校の授業についていけなくてめそめそしたり、好きな人に告白できなくてくよくよしたり、友達に迎合するばかりで言いたいことが言えずやきもきしたり。いつも私は転ぶのを恐れていた。

流れていく景色の中に、転んでばかりの自分が掘りおこされて物語が入ってこない。走っても走っても行間をまごまご行ったり来たり、ライバルたちに抜かれますます思考が乱れた。

私はいったいどこへ向かってるの？

ゴールテープを切っても本を閉じることができなかった。完全な敗北だった。目の前に

打ち出された完走文は、それでも文字でぎっしり埋められていた。熱を加えて炙り出される絵のように感情的で、そこには胸の奥にためこんでいた言葉が描かれていた。誤字脱字が多く、とても美しいとは言えない。なぜならそれは途中から、父への想いにあふれた手紙になっていたからだ。

どうしていなくなったの？ 私たちを捨てたの？ 会いたいよ。

あの時、言えなかった言葉が吐露されていた。

「コーチ、すみません。心の乱れを修正できませんでした」

「お父さんがいたからだろう」

「えっ」

「黙ってて悪かったんだけど、実は君のお父さん、僕の先輩でね」

コーチは自分が実業団時代の父の後輩ランナーで、娘を頼むと懇願されていたことを打ち明けた。

「お父さんは誰よりも先に君の才能に気づいたんだと思うよ」

「どうして教えてくれなかったんですか」

「邪念が働くと思ってね。沿道で応援なんかしないって言ってただけど、いてもたってもいられなかったんだろうね。先輩らしいよ」

父はどんな想いで読書完走する私を見ていたのだろう。

「動揺させて悪かったなって言ってたよ」

「ほんとですよ。つくづく自分勝手な人です。娘が動揺しないとでも思ってたんですかね」

「でもね、お父さんも本を手にもた走り出したんだよ」

「今さらですか？ なにをがんばるっていうんですか？」

どうしてもひねくれた言い方しかできない。

「全日本マスターズに向けて」

年代別に記録を狙う大会だ。テレビ放映もされない地味な大会だけど、年に一回、夢に向かって全国から猛者たちが集まるのは知っている。

「優勝したら家族に会いに行くって目標をたてたみたいだよ」

「そんな目標たてなくても会いにくればいいじゃないですか」

「それが自分のケリの付け方だって。逃げてきた人生を恥じてるんだよ、きっと」

私たちのやりとりを父は競技場のどこからのぞき見している気がして、気弱な父に私からカツを入れたくなる。

「じゃあ私からも伝言を伝えてくれますか？ どっちが早く夢を叶えるか勝負しましょうって」

「悪くない提案だね」

「問われるのは転んだあとだ、って」